特41
107

089684-001-4

特41-107

娘節用（小三金五郎）

曲山人／著

M15-16

DBM--1977

大坂大字五行義を夫木

僧入義を夫木

さわり名入 浮瑠理都ど逸

浮瑠理文句入 選とぶみり

えらみ りんく 端唄都とのゆ

ゆきり名句 浮瑠理大全

俳優都と以浮

常磐津誓古本

釋迦八相 倭文庫 万 應賀作 柳亭 種彦作

偐紫田舎源氏

大坂大字五行義を夫木

僧入義を夫木

さわり名入 浮瑠理都ど逸

浮瑠理文句入 選とぶみり

えらみ りんく 端唄都とのゆ

ゆきり名句 浮瑠理大全

俳優都と以浮

常磐津誓古本

釋迦八相 倭文庫 万 應賀作 柳亭 種彦作

偐紫田舎源氏

找も男女の交ひ八百萬の神達の出雲に御社群 群 御ぶ祭ひて 祭ぶ

元祖を尚ぶる竈の神の家ぶ根模出生の神を尚と物置の出合に厠に行て

ぶ男の口説妻寡婦と美食よの芋田楽

喰ふ換者に ぶんぶる隠居ぶむる

やぶれる女ぐるひ。常屋の長者屋つぶれ
家財を没入れ。坊主の壺へくるひ込。浮名
を桂川の海をもぬらすとぐく。傾ふらぬ。
ちよつとの一部の冊子。ぬるる人の
花ぶ稿はもぶ。小三郎ぶ一部は書の彈
ぶいぶ。書ぶ繰りたる。書物は

ゆ書。補ひて。需めよ書ぶ。
をもつ為ぶ。もぶこの書ぶ。花
加へ。書ぶ本ぶ書ぶ。
文政拾四年辛卯孟陽　たりぶ
明治十五年十月新刻
江戸　文着軒一ゆ

六兵衛
長女お鶴
石傾城
真名宿
古鉄買
六兵衛
六兵衛
二女お亀

假名家の文之丞

斯波の家臣
假名家金五郎

今三助

歌妓
小三

養老人
醜女

小三金五郎娘節用前編上巻

江戸　曲亭馬琴補綴

そうたん

そもかの大山石尊のさげ物よ。納まべ長刀の切やめ。の。美厳み
その名を止めよう。弓の矢場のあるさんが。活業の助となまる
静けき御代のことふるまん。彩波家の藩中ま。級名屋金字
の進とのくる者かり。二人の男みかりるが兄の文三郎とのひ。
分の文次郎と喚みて。両人とも文武の名を。考よたげこそ

ぞ勿れ。ゆゑ如何。兄弟の中に奥づとめの四側を章といふ。容貌よろしき女と人を定め娶りうとめてうとうとしく。月日を互ひよりひつのりて。志のびくの窓掛よりも章いのつゆ呉ねる懐妊の身となりくるぞ。此度今はもはやかくべとても添ふ身なりがたしとおりへ二人いひそうふうとうとひ。ある夜宿を君びいでまとーの志べと便りふして。雑波をきーてのぐりつ。波方此方とさるようひて。おりへーうねり目を送りべ。この地よりとても要なれるもと。女より室敷へおりもたてこまぢ所のねうふ

さやうなる家を偽て。学文級法の指南とーつ。月見紙あふおりーぐりてようその枝よ偽まとれべ。僅のうちふ弟子の。あまさ付て繁昌志れべ。のづうう金浪の。歌通もよみまべ。世ぞの金銀人よ賦るどーて。その利を立て家をあ。巻もわどよ月満て妻いやもくとまのどた男子と産出ーれべ。若成金を弟とよびおーた。蝶よ花よとそぐうちも満れべ鉄る世のあーひ。妻い産後の肥を抜うよ。の色風を引きて。医療をとつてもとーう人どもその殺要よあく。つひふ世の風よさそ

いま。冥途の縁よおのもたね。文ゝ亜へ使うみろ人。妻ゝ別を
て今さうみかゝ。やうゝ母とらんどもかゝ。ものゝ
おれべ。浮く野辺の送りをして。沿稼ぐろよ。ひろかし
ゐどみ初児と。乳をくてゝそゝぐ。乳母とかゝて養育させ
兵金ゝ弟とをのうちの。ゝのごくみのとゝ。光陰のゝとかぞへ
ろう。ゝよまゝ珠数屋町よ。古鉄買の去来湯とて。夫婦かま
くみ者ゝのゝ。年ごろゝみのゝ。ゝしゝべつゝよ是をゝく孤ゝ。
神仏よいのゝ。ゝ。その 仏仏の毒ゝ。ゝゝん。妻ゝ今ゝ年ゝ

十歳よりまゝて。ゝどめて女ゝと備けゝゝべ。夫婦のゝろゝび
大ゝゝゝ。名ゝ人ゝゝゝゝて。ゝ鶏と号。ゝゝゝ育ゝゝゝ妻
ゝふゝゝび妊ゝよりて。次の年ゝゝ女ゝと産ね。去ゝゝ今
度ゝ養生の。悪ゝしみやゝ十のゝ人の。年ゝのゝ。後ものゝゝ
血ゝゝゝ人循環せざるみや。悪血ゝ人もゝゝゝ。ゝと後の
ゝゝゝよゝゝ。そのゝやゝのゝ。ゝゝたゝ。ゝのゝゝゝ養生
ゝゝゝ。ゝゝ空ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ去来湯ゝゝゝ
と神や仏よりの。二人まゝゝゝ。今ゝゝゝゝ

なく。妻いまと捨亡夫の。敷よ入る牙の歯敷よ。なげくより外なうり。紙。迎取の者よいさめうる。まづ亡敷いを納めく も。とさまうろ孫一胸のうちふ。やうくおりひつぐ。まべ食した くうーふ男のを一ッいぐしてニスのふとべそぐてんやうもみう ーー由糸紙と鬼ともも蛇ともも。敷へなどふと推んうとい ふまでよ今ーこて。一月くくとしうさると役名屋文く 出いつ入国くおのぐ牙よ引うべてん推並ぐく。今ふ月ド 由なくくうを敷。歯牙のをと祝ちぐぶのひうみて育く

なべ。その親のをもおーしかうくぶりやせんと人づてよ。この 変をいひ入て。妹猴をうくひうみ。名紙お亀とあづけ まうく 敷絆の金と云云湯よおう。掃ある猴とたべてをの人と情 なる涙節ふ。云云湯いいくようびむまあげ行まを添く 憑ぞ。おまようう後めぐまーー。金をかくお殆よ添てきる 家人里ふつふーー。ひだたあき世とおうくう。されべまう妻妻 ある。役名家が家ふ人文ぞ出ぐ。不表なして家出せーくべ。 文字ぞ進い怒りうをう。ふくくうぬ伴とり人ども。世ろの

刻貞月衣
假名家文之丞寓居
まて妻玉章金五郎
を分娩の図
高橋孝信画

かりくしへの因え。親の名を出を不孝の罪。うち捨てもあり
是程べ。あるいは子の新たなる者人幸。文盲を動尚多。分
文次郎よ家智紙ゆづり。猛を迎へて是ゆ要合せその身へ
源居一名と白髪。ひつくあて書もうち。文次郎夫婦の中
ゆ。一人の女児を備けり。是よつけても文字をへ文盲のつ
ぶ。ひつくいひつけてうち業ド。かるひ出ーてのうゆ改よ。
今へ長浦よ伝あれて男ゆ持て不是ゆ。ぺもと人の風便也
業ドの物もやまりてゆくへ文盲ゆ。文次郎ゆ猛ゆ

要合を家をゆづりべ五筋も伝ぞと知よるひ居りり

第一回

さきべ月日ゆ関ちゆくて文盲ゆ一ゆ金ゆ郎へ今年十
七才お亀へ十又の妻をありーゆ二人とも天性の美男美
女ゆーて華洛廣ーと人どもたびひ稀ゆる容彩へ柿と
撰の物撰くべおくぞ生きるね風情ゆり文盲へこの
年ごろ古ゆをなれ遠き都よ世をかるその内も二人まで
ゆとまりけ行不是ゆ人ゆも十年ゆまりるべー

とろ。猶々この家を接け出て。父のもとへ優しき人。あるべ
いで情しく。子を持てもる親の恩。嬉ドがるとはとく
おりよりのうち考へ入れば。手家の樣とやぶり。妻と不
義して出奔せ―うど。今まも俺のかのひあべ。ふてび手家
へ立ねるとも。ひとんと。彼是おのひあへをみぞ。
ちやくとう金子。文武術成業へ。元来さが
きたうまを。一を出て男とちる。文武のもの長れた。
義程も。全く上達して。今いへ金子。武士の名へ成。

独り和歌連俳柔の湯挿花のたしなまた。人をくとう
傷を。とる。ふた仕士とへ。ありふ。お爺もまさ世ふ孫
した義明のうまれて。文おとみをおろ人名へさうあり
物なち絵針の技芸ふまぐ。琴三味せんの調べ入ぺと
うつくしく。ふふまを。如ふみの名ふ。その生ふたのも
ちく人もうとやむをうふ。ふまべ。文ふ生へ。ふとぞしてたたの
父ふ動ふ。ふ絵のふ。ふ人を憑ふく
つくぐと父の義ふ。ふ人名へ。猶舎ふへ。白義も無頃

の文ゝ亟が身のいとづゝうゝ家出して。今は義絶おそれ
み文学武芸の師範しつゝ。不自由なくくらせう人孫まで
出来しと聞つるがうらやましさや尋ね生りト
おりゝ打うゝ。人づてよて文ゝ亟よりこゝびゝ云をひゝへれを。
白髪へう邑さひとくさゝねど。うつたんを者人動者と
故為せ一身をたゝやまくへ。俳をとゝ申ゝざれいそのうち
首尾をゝつくろひ。若へ孫がひて出入をさせん。文通のゝ者
しうゝ。又孫の金吾へ飛ゝ身ゝさいひ。文学第五

男ゝみゝれば。逆ひとつゝ巳ゝ引ゝ。いくくへ仮名家の数
名を相續さまるゝよ。文変をとその人待遠しと過ゝ
要細と聞ゝうゝも文ゝ亟へ大ひよろこび。こゝが身の出入へ
かゝへゝとも。将軍家へつゝへまへ。ものゝ人申たゝ
と金吾へ逆く打だ。種舎のことくくしく語ゝ。月ゝ
ぞ逆ひの者ゝとまもて。種舎表へくるべしと申て金吾
へ今さらみゝひげゝくゝ家と絶へ。身のなゝ生ノト云
ゝ。一人の親とのこゝおゝたゝ。ものゝ人ゝ子どもの時ゝして行

きゝ互ひよ支婦ぞと猶よかりひーお亀みも別さんとのお
憂よ者ゝいきぐ拵きくへさねと。何うみくろおくをとも行くうち
どけてみくくくね。中あるめどうち拵て行とみやとさきゲ
きぐおびこぞちの外へ前密きるを理りうう。お亀白
この多関ーより。お個さの業ーご。うやさん形やとかの人
うち。猛会より金子帯拵迎人の者ーうび。今へこと夜
とあり。ろうと。人間の関の書び法。ふさぐへ女みの者ゝ。
ふぐよ猶白むきぐ色。祇園より風と立まに。家引うぐ赤

叩て。涙のひまもみくたえう。ちうくう薄み引あみて。立まに
たる屋風の中成とう長て。逆入る金子帯「お亀ろへ
どうぐぐ。やつたう気ぐこうるへのうト
「ハイいろくのことと業ード。ぐそくて気ゲふさへでいろ
そ腹痛ぐらくーきとト金子帯おうとおきもーきく。おくくく今家業の
本家へおいうゲ別まそ申くのぐうう。夫てふさぐとうへの
ざうう。マアくゆへとも かくもうへ南でいうさうへみ。えみ
立ろう。引ふつそへ。移のびせそうるへうう。ちうと屋でも

みぐるゐ　ゐト　どうぶとうさうせん　長とうのけまるまどの事じとあるなり　コウ
おくあへやりくちきまとおきんくきーうつむく
おくあつ。つよく　腫　ゲまるゐ。ゐんぞ　業でもやらうう　ハイ　丑
ぎくんぞうまんぞ。ゐんまう　乳ゲふきんで　腫ゲおのくてなりま
せんうう。今　表ゲ　実部　教　とのきまーうョ　全　ーうう。腫りつま
らねことをくよくもつて。ゐんとうの　痛　乳ゲ　出るとろいうう。今　月へ
ちゆうど　冬　乳へよ。芝居でも　行　て　足　をべらく　ーらへ　私　ゐ
芝居も　足　くいどざいません　全　ハテとまつさのぞ。行　て　足　れべ
りゲのゐ。周義ざの　瘍　寛ざの。ゐ　弟　ゐんぞゲ　大ひやうぞで

ぞ　見　ゐ　乳　ーうのゲて　生　くゐ。　瘍　考　の　門　ー　犬　の　腫　ふ　助ゲ
又　物　犯　の　ちやりうと。　部　蛍　で　ーうう　ふ　腫　の　ちゲ　ふ　ゲ　ゐ。
足　ゐ　ま　ま　よ　物ざョ　ーさやうでどざいまゐと　子　アノ　ーうぞや
ゐゐくとは　一　所よ。　腫　花　へまゐうまゐと。　腫　芝　居　で　足　ま
さ　俳　判　のゐ　紀　伊　国　屋　へぞうーう　ま　ーさ　全　ーゲ　腫　ふ　助ゲ
今　ゐ　乳　物　へ　飯　つ　ゐ。　ま　ま　く　俳　だんゲ　よ　く　つ　ゐ　去　年　の　表　白　町
芝　居　で。　苅　菅　の　狂　云　と　ま　ゐ　ゲ。　近　年　ゐ　ゐ　人　大　ゐ　ゐ　で。　ゐ　ま
ゐ　ゐ　ん　で　も　出　ー　ゲ　け　で。　所　も　屋　ー　た　も　紀　の　く　ど　ざ　ー　ち　ん

よ女供が。初へきまること上方まで。りっぱな俳諧よ一
その初へきの名い紀の屋屋ふや。まさろさあ方がまさ赤へち
ぐう牡丹しさう。マアぜんなでどざうませう 金「き紀の屋やうらく
男こそそやアぜこの人ど「どどのお人う四春どたうなぐう用
のこうう四元まで。芳羽屋よ紀の屋屋と。ッみちさうよえ
ぎきりや四宮兎と学文のなへきよおち出なさうぐうさんが老弟の
さうらくお養なさへまよ 金「なんのうまさうぐう解せね
「上りませんえ。あるさのうきさト思ううえ 金「なみとらふうと

おりうこう。おいらが顔の掛おうこうらくげんみおひ男のぐ「
アレうんそでどざんまんよ。ア上ぐうう私へ。ちぐへうちうみ茶
きーそ。ちくなるるを楽ぐまんと。脂ぐうぐへみうまたよ
金「なんのるさるおーくもれ人。戯侯へおまうぐんぐ。ぐんよ
ちんまうあんどるさんる。遅ひと一所よりさの牡。遅うへ
立て行ても。為つへうう早速ふおめ人とむうひよよたうう
ちっとのうちぐ。待てみるきうー来ぐうへ。祝父がおめ人と
おいくと夫婦よきるとかるてのの量見。ぐ上ぐで今きへへうう

よ。親の貝を去のんぐ。ゆまめつさるもきれ人くそをぐおあ
の量見ひとつで。りまつふをざつく。ぼよとそぐ佐ぐ
ゆく緑づくもぐ。ゆく。更へ。勝手次第。ゆくさゆう
来ゆく行くつ。やよゆつさ佐ぐちつのゆおゆやつ「ゆ
へ行のいやでぐつきせ。ゆふもゆへるゆだつつ。たとえどの
ゆくゆとろでも。ゆゆさぐ。ぼでぐさへきたゆく。私へうを
ちつどざいまんぐ。ゆゆさへ東へおゆあそぐ。ちづまの
女中へよふで。きよふをぐとヤシきたく。私のゆるゆの

へ。とてもモウお持ゆさるへ初とてちりきたるゆの来ぐのことを
考へまんと。ゆくても病の貝もちひきせば。そのうへ実の父
さんへお親さへ兄ね。そのちふ。手紙よお果ゆされ。ゆよ行
るへ帰さんひとつ。里よ行てお出ゆされべ。ちつぞや名
告あひ便りふゆつちゆるさつ。ゆく。きせうとゆば
さふ。そのかひもゆく。里親へ。ぐゆされて。ゆとゆの行よお来ゆ
めゆさ。ーとゆへるゆや。今へ杖ゆもたーらふも。力ふちへ
おちつさんぞつ。来を憑ゆ。ーあるさふまで。おりひを。ゆへ

金五郎お亀の
別室へ訪ふて
気鬱を慰む

高橋年隆畫

今度のおりとる是。心細い客よりまゝと
ろわくとおのひやう「ゑんのうさ。そんゑふ来のまゝでと素
でもゑでおろー」ひて　ゑゝぐとそでふ　のぐべ金ふ弟もその
どるゝゝ乳ゞふさぐ。ゑゝどゑ狂よちやくゝろ是。婦さんふ
も生ゝろ是てへ心ゞそへもの内とものぐ。人ゑゝ老ふ不定
さぐめたへのゞ世のゑゝひ。今ぢりへ律仏のかづくゑも
やうゑのへ。ゑる宝まゑる身の富世。それとくゝく乳ふて
ゝ絡ふもゑゝとぢやアねへ。又たへうゑ是くふ。遠くへぐ
つく行べゝて。おめへ世家とやづりでもゑると。ぜひ聞とゝう

絡べゑゝぬゞ。さうゝへ階へマアぢうまゑる心ぐ「そもやアこウ
貴君ゞ　ゑゝーやらぞとも。海より山より田園の海へおとう
さんのゑゝーやゑゝとを。背く心へどざりませんゞ。此ゑゝぢう
いそもたまゞ。たゝへ妹使のおゆゝーをうけぎとも。ゑる
ゝ成のゑて余の人へ。海まゞ山へゑゝへどざりませんおゑぐ
東へおゝぐりあそぢして。問者伝もどざりませんと。ゝゝへ
そのとたそ。ゝても生ゝて居りません。死ぬる心でどざう
まゞ金「ゑる家ゑとをいひゑ。ゝゝ是へゝんの絡乳とゝへの。

死ぬる人あり。扨も若党とまるゐもたちつぼ。源氏と
かの人べそをいろくよ気とのむどやァれ人。そんみまりん
とん云孫人うつぽさーのうちち幸抱して。煙りをまるのとたて
かる。コレサおうあ。あぜそんあみ泣みさる。子供うあんぞのやう
ふ。ちうまさく一生あねとらんとどやァみー。ちつと気をまつ
うりのちるト「ちるさがそんあみとてけて
やさーくおつーやつく小さるうど。扨うるーくありまる考
ぐんさうまべえまるど。おうりみむぞそくありまーく。

たるさがお宿よお出なりそだるちちつを死でおまくぶ
まーくト（全子弟のぶみちうた全）「ちおあ人もマア私のようにあんぞと
（みげくちうとくくくくく）
りんと死ぬくと。扨もあんその繰云。マアよくのをつつてえる。
とんみとをりんと年寄めくぐ。今世の中ガ静ざうようれ。
者の乳世の附でえる。なんがおらうのやうみ。ちようつる者
でも。武士の種ざう。軍のところへ。是非出るけりやァあう
ぬいよう出まべ敵の首とるやー。こちの首をるる
やら。二ツよ一ツ命ぐみ覚を持て。戦場人出るい武士の

あらひよ。むうーと今とくらべてみる。まことの楽みは世の中。そんな危い狂云もあり。武士の子よりくいかをとやあけまど。実よ今の極楽世界。まくの原理考へると。三年や六年遠ざかるくも。若よまる程のことも極へば。そこがやつぱり自分務をば。十分でも不足よおりの人情のかりめへ。さのそまざくりかあらびばこそも。きあのくおりへぎ時長を行るよ。雑乳と出ーさそのかとびへ。浅悔ーても仕ドまりれへくりむと大きく持ぐりてよトゥ。うりまるまどど金ぐりさぐりたとべみ「コロロ且ととをこみてさとをおりりへ女きりう「コロロ且

形さあへ且形さあぐちりうと入ッまやいはしとトいみよ金よ弟へ。ヲイくとかうあの。於爲出てゆく。父父を坐い一間のうちよ。煙草あらーー文よくかる。金よ弟いまくやうみ父の側へよかとまる「ヲ金よ弟う。叔モウ猫ケ人るのも。四月ゑまべ。後の須変と。爲ゑく用をまりぐよへぞや。それよりみくくとくくといひ関うをまでもみれど。挑みへこぐみ我笑人投げ。其生をとそて安堵ーてをたるとと。焼世の維みよる疲の弱みゆあよまりへ縄の者。名歌でさへその行ると

況て人るい粗更よりも成長すると親よりもうまし。たとへ考慮伸とても。猶刈漁どるやざるまでも成長人の人仝ドと。完
たちやそちもセ十八ゐれば。業ドるわどのとへ人のへが。彩らへ人
異るりのみまど。人ゐるくようう文武の左もまぐまとこらへ
いまいが。マアどのやうる人中へ出してもまんざら恥しくも色。と
りへてあめが智よりそう。蓼よ漫ドて多くの人と。服下よ足
ぐしてへうらぬぞや。又一ツうへ祖父さゐと太りみうみこまま
うりて若彩して三ツうへ弟文次弟い。若父とり人ども

そちそこ方が為よい。りへずと知まさ血まちの叔父ゆゐずへぶん
ともよ。ゆよそむうぞ。是まさ者彩せゆやうねぞ。まさ強
へへ繁華の五地ゆゐ人礼が都と遠へうよく風俗とのま
とゆよ。仲るの付りひそれうも時宜みうてへのつぴたゐう
彩ど。物ゐ方うちぞゆして。義よさそいま月よううまへ女
弟異ゐども三度み一度へ。そうされゐけやァ彩がへいさ。
さうみがう傾城傾國の彩ゆもりまべ。かるうぎふくたるら
ねやう。ゆよとうと礼へちやゐへねぞ。忠孝よ心を励ずべ。その

文之丞東都の実家と金五郎は相續させんとて談ぜ

金五郎

文之丞

分の来もかりうゝ移ど。とくよ酒ゝ入滝りやまく。むゝ
名将勇士も色よ迷ひ酒よ溺まて。大切の身とそろがを側
も。ぎくかるとゆ名あの色いふくさまゝぎ情めよ。てが考云
の和成いそるべ理が考まねとゝ入通り。きやい側いこのおまが
若気のいうとゝひながう。ぎか別るむゝう祝を捨た郷成
そるれ。家出なして考ぎーがうちゝ俗居もさがあぎ。さねよ色
が祝の身でゝ不孝なゝでも。みくー罰かゝれとゝそうねみや
あゝよ俗居とさがあてゝう。仕合をとゝ自ゆく異さをさの

雅義もせぎ。人なゝくよ世とおゝる。今あゝしも浪くの日
が者の屋ゝゝみれど。不孝の罪ありやどのやうみ。今さゝ
悔んでも外人いうゝびあくの原理をゝく無まゝて女ゝ生
外かをゝゝの遠ざるやうみまるがゝよ。今変ゝちがゝぶか
家へもゝゝまやを。ぎまゝ君へつるやゝとゝめでゝく。我身
のゝゝびうのゝ人ゝ。又かゝ亀いちゝさゝ門ゝうゝちみとの
ゝ家成張ゝうあべ要合して支婦よ右やうと。おりゝゝ居れ
どゝも。かゝ家人やゝべかとゝて。ゝがをでそぎて一猿でも氏素

性とらひ弟の女房ぢやうの振舞妻のあるまじ。様よう
めのさうづき紙さをとらへ中でかーっそちを被地へ
うへ。お亀うへ婿うへくあの家をゆづうべうまらへまう。外よ
楽しーそのぞーをみれべ。かるうびとも今の義例をを
見てへうねぞやト世のうと きづくてさをを云の業の。
たどめをうりと金弟つぶさふ皮て物ようさ。ありがさ洞
ところ見のみぐ見ようあく金「ぜんくとうとうとみてかみ
きぼ例きうと者ようへきた。ありがふどぶへきた。

りとうりおうろる私なれど。あろうのおよびまうをうへ忠
者二ッ成たげこまうぶうる酒ぶんかみのうへと。位大
切よ位者生なされかをとやくふかを者ーあされてぐさう
はトあんさうみ文イヤそをへかくべう。お亀もそちとるド
やうよ。ちひさへ性くう者よそぶちて。兄弟月拍ようし
さうう。今ろうもかるーううぶ。見も定まる約束ど
女分別の出ぬやうみよく帳ぐひとまるぶうへト輝も
あるもかをうみ。頭成たよ金弟へ父の義成迫

きて。おのゞ部屋へ入り。明日出立のことなれば。のこれ彼れそれぞれ
そまぐゝの旅の準備と為もなく。その人々夕餉終れば
やうゞ成つゝひるゝゝ。お亀の部屋へそれと参り「へどうぞ
お亀ちゃんこゝへ乳ちゃげ来つゝろ」「ハイ何ぞうもふさだ
つけで。やつぱり肩痛ゞいゝ」「まあ。アノ何なんでも
あさの朝。お立のそだのもどざりまあす」「さうさモウ
近ひゞ来てかるうゝ。どうも延さまも若ねんのさそをだうゝ
おめんの顔とうるのも今夜ばかりゆゑ。ようれねゝあえお

さあよ。強そて垂ちおつゝく者さよト笑ひあゞゝ新とえ
ばかりあいゝ恥ゝしげゝ新といゝあ「まさそんな虚なう
ゝ。そまいそんの乳やまめでどざりませう」「さうさいづま
おいらのゝゝこゝ虚さのゝ。ぞうでモウ明日ゝゝ。居ねゝのざう
らそんとうみやア若ねんだづど。先刻おとつさんゞ云なまつ
さこ成お前も大々安さらうゞ。おいらゞ行さその居でへ
おうゝよ好ゝとつてやつく必家とあづるとおつゝやつさヨ。
のゝ。その舞ゞ亀男ゝ。着ッゝみまうこんでおいらの

高橋年隆畫
文之丞及び亀女
金五郎東下の名
残を惜む

やうな者ハうゝ向でつゞけざらう「きんのマアりハ
ゝハ茂みもそんなころハ持ませんたゝ業平さんゞ
生れうつくしき者ゝ生れもしハいかさまえうるころハ
凡の拙ゝでもどざりませんョ「いてかゞんるゝをとらへえ
久るころハ居士の心ゝでけるざらう「モウくあるこゝゝぜ
その やうみ私ゞやまこゝ紙おうゞひあそび生ゝ「
うこぐりやアまれゝうれど虚らゝハ云やうざうゝ。そこゞ
伝実まこゝゝかゝゝゝ。ゝ程乳紙出されゝで煙りまるのゝ

結ゝかゝるよゝ脊とこゝれおうゝハ強ゝく「こゝこゝゝそどの
やうみも結ゝる乳でどざりまるうゝ。ざゝぞきゝとお便を
早くゝまゝてゞさり体ゝ。ざゝひゝつゝね名結りの洞
うゝかゝもまゞ者ゝねゝのかゝまのゝくもお亀ハ
金弟ゞ支度まる。うゝ人ハ持りのゝどゝ乳そゝくるうち。
用意とゞくゝそのひゝうべゝざ出ゝとさゞゝくゝと金弟
ハさすゞみもゝ結みゝの結れどゝ。金うゝれべ乳とゝ
ゝゝ。ゝ父とおうゝハゝこゝ紙つゞけて。近ひの者とうゝ

芸よむづよくも旅立を今ゞ名物と文を出かうあも芸
よ門出まで。かゝ出ゞ金の。蔭又あるまでえく
見べ。かるさも足久る別れの涙ぞひよ拍の愛迎霜よ
かく見て後いとゞ多ありぬ

明治十五年九月廿三日御届同年十二月出版

定價拾錢

東京日本橋区馬喰町二丁目一番地

木村文三郎

翻刻出版人

小さん金五郎 娘節用前編上終

農家作法用文

刑法 罪法 片カな付十五銭
治罰 字引 〃 三十銭
同 〃 十銭

法律ハ御山先生の発意を纂ぶ所の書にして形容の多くは依て今版農家用作法の書の編を解レ易く且便宜なるを以て改正精作の作法を多分の付せ仕様ヲ各面に入確摘せり良書なり

この書ハ先板中時領帝三和政刑刑法治罪法を解し安きやう西仮名ヲ以て注訓せり書なれバ初学の者速に達する筆使の書なり

鼇頭改正明治文証大全

法律ハ先づ古学ヲ誘ふ者の欲絆并に古像及び法度者の住色名所古跡或ハ電伝面の如きを賃徴表造不術細画の各面を以て示す且物ハ日用の書編部仮名がきの事重伝の通伝ヲ二面するまで数百のヲ記載一改者ヘ作ノ人の務ヲ法律ヲ誘ヲ先ハ法設ヲ新面号見れるく部載せ一あまバ詳くべうぐ務書あり

算法新書

算盤通書 大中本 小本

法書ハ長ノ内古先生の故実ヲ主て筆法書の数ヲ一と維作ヲ比べきを書籍を出ヲ古今ヲ一ヶ所の務書なり

注ふ諸芳縁乗あらんこを

善悪膝栗毛

こゝハ曲亭馬琴先生の原本ふ〜て子供の時より善悪と二ヶ道ヲ分らるかふ〜て種々のあやれもたりて極ちりろ死冊大あり

東海道膝栗毛

夢相撲胡蝶物語

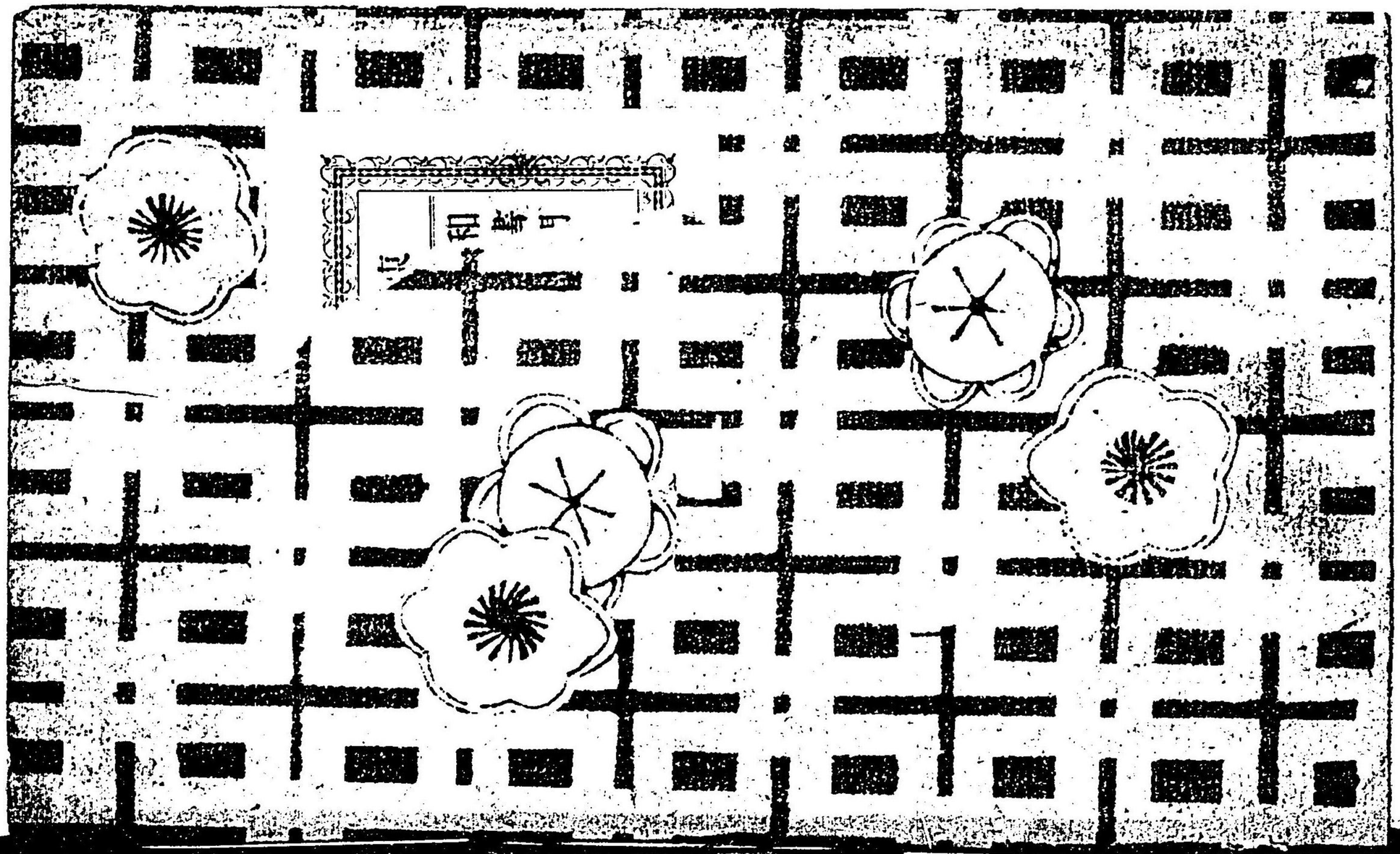
小三金五郎 娘節用

かゝる山ぢふし
猿かふ合戦
袖づみの家入
朝ゞの物語
かゝ見仇うち

ぬんぐ茶釜
花咲じ以
著ぢ吉切雀
狐夫の道行
桃太郎一代記

○絵本高氏物語実録○忠臣蔵実録○加賀三山実録○川中島実録○松ヶ浦の
記実録○柳沢孫右ふ実録 ヲ大略の書ヲ以ハ余殺ヲ珍ヲ物ヲ
ヲ不沙汰板細画ヲ以て又ヲ中〜

る横町二丁目
木村書房板


日崎和
ヒ